

## スポーツ庁 鈴木大地長官 ワールドゲームズ大会 現地視察

今夏、ポーランド共和国ヴロツワフ市で開催された「第2のオリンピック」と言われる第10回ワールドゲームズ大会を初めて視察させていただきました。

今回の大会では、日本選手団は過去2番目に多いメダル22個(金9、銀6、銅7)を獲得するなど、代表選手の皆様、また、代表選手の育成・強化に多大なご尽力をいただいた指導者の方々や各競技団体関係者の皆様に対し、深く敬意を表します。

特に2020年東京オリンピック競技大会において追加競技として実施することが決まっている空手やスポーツクライミングは、マスコミからの注目度も高かったかと思いますが、多くのメダルを獲得され、2020年東京大会に向けて期待のできる結果であったと

思います。

また、私も現地でたくさんの競技を視察させていただきましたが、オリンピックでは見ることのできない競技がたくさん実施され、それぞれに魅力があり、こうした競技に興味を持たれた方々もいらっしゃるのではないのでしょうか。

スポーツ庁としては、このようなオリンピック非実施競技を世の方々に知っていただくことが、私たちの目指す国民のスポーツ実施率の向上や、一億総スポーツ社会の実現につながるのではないかと考えております。

また、今大会に参加された総勢18競技98名の選手の皆様におかれましては、それぞれが世界のトップを目指して熱く取り組まれており、「オリンピック競技でもどんな競技でも



スポーツ庁 長官  
鈴木 大地

### Profile

すずき・だいち 1967年3月10日生まれ。1998年ソウルオリンピック100m背泳ぎで金メダルを獲得。現役引退後は日本水泳連盟会長、日本オリンピック委員会理事などを歴任し、日本の水泳界を牽引。2015年10月、スポーツ庁初代長官に就任。

変わらない」ということを改めて感じました。

今後も様々な方が、それぞれのスポーツにますます邁進していただき、日本として幅広くスポーツ振興を図って参りたいと思っております。



大会マスコットキャラクターと



激励に訪れたアーチェリー会場にて



全選手(7名)がメダルを獲得した空手チームを祝福

## ワールドゲームズ2017 記者発表&日本代表選手壮行会

2017年7月5日(水)、日本ワールドゲームズ協会主催による「WORLD GAMES 2017 記者発表・日本代表選手壮行会」を日本スポーツマンクラブ(渋谷区:岸記念体育会館)で開催し、代表選手をはじめ、JWGA加盟団体、報道関係者、来賓など、200名を超える方々に出席いただきました。記者発表では、師岡執行理事からワールドゲームズの概要説明を行い、報道関係者をはじめ多くの方々が興味深く耳を傾けていました。壮行会では、鈴木大地スポーツ庁長官、竹田恒和日本オリンピック委員会会長、泉正文日本体育協会副会長から激励の挨拶があり、イズイドルチク・ヤツェク駐日ポーランド大使からは歓迎と応援のメッセージをいただきました。また、2度目のワールドゲームズ出場となる空手の染谷香予選手が選手代表の挨拶を務め、大会での活躍を誓いました。



4年に一度の最高峰の舞台に挑む日本代表選手の皆さん



竹田恒和  
日本オリンピック委員会会長



泉正文  
日本体育協会副会長



イズイドルチク・ヤツェク  
駐日ポーランド大使

## 第10回ワールドゲームズ・ヴロツワフ大会の総括

特定非営利活動法人日本ワールドゲームズ協会

もろ おか ふみ お

国際担当執行理事 師岡 文男

国際ワールドゲームズ協会 (IWGA) 理事  
国際スポーツ団体総連合 (GAISF/SportAccord) 元理事  
世界フライングディスク連盟 (WFDF) 理事  
一般社団法人日本フライングディスク協会会長、上智大学 教授



2017年7月20日～30日、10回目となる非オリンピック種目の国際総合競技大会「ワールドゲームズ」が、ポーランドのヴロツワフ(Wroclaw)市で開催された。オリンピック・パラリンピック開催立候補都市が、大会経費の高騰により激減し、2024年・2028年大会の開催地を同時に決定するというかつてない状況に陥っている中、ワールドゲームズは開催都市に施設がない競技は開催しなくて良いという当初からの特色が功を奏し、第2回のロンドン大会を除いては、すべて地方都市で開催されてきた。オリンピック憲章に謳われている「世界中のすべての人々が一切の差別なくスポーツが楽しめる社会の実現」のためには、低予算での開催が可能で、毎回種目の入れ替えが行われているワールドゲームズのあり方は極めて有効になってきている。今回も女子ラクロス、ムエタイ、フロアボールが新たに採用された。

今回のヴロツワフ大会で、ヨーロッパでの開催は6回目となるが、ワールドゲームズは(1)国際オリンピック委員会(IOC)「オリンピック・アジェンダ2020」提言6-1に「IOCとIWGAはスポーツプログラムの構成およびそれぞれの評価に関して緊密に協力する」と明記され、両者の連携の覚書が再締結されたこと、(2)2020年東京オリンピック追加5種目はすべてワールドゲームズ競技から採用されたこと、などにより一挙に関心が高まり、参加国数は過去最多の102カ国・地域となり、テレビ放送をした国も131カ国に増えている。さらに、IOCはデジタルプラットフォーム「オリンピックチャンネル」で大会の様態を発信し、飛躍的に多くの視聴者を獲得した。日本から観戦に訪れる人も増え、スポーツ庁からは鈴木大地長官とスタッフが大会を視察され、IWGA会長はじめ幹部役員と会談を行った。大会前に岸記念体育会館で開催した日本選手壮行会にも鈴木大地長官はご出席くださり、日本オリンピック委員会(JOC)竹田恒和会長、日本体育協会泉正文副会長と共に参加選手を激励してくださった。TBSテレビは今回もIWGAと放映権契約を結び、2005年の第7回大会から連続して大会の様態を報道した。また、ワールドゲームズを後援しているIOCのバッハ会長は、恒例の開会式での挨拶だけでなく、多くのスタッフとともに大会前から現地に入り、IWGAと大会組織委員会との昼食会に参加したり、参加競技団体役員との朝食会を主催するなど、今まで以上に非オリンピック種目団体ともより密接な関係を構築しようとする姿勢が見られた。今回の大会は、IOCがオリンピックムーブメントとして、ワールドゲームズがより重要な大会になってきていることを示した大会でもあった。

改めて今回のワールドゲームズが示した「第2のオリンピック」

としての意義を以下にまとめた。

- ① 夏季オリンピック競技大会を開催することが難しい都市でも、新しく施設を建設することさえなければオリンピックに準じる大会の開催は可能であることを実証した。
- ② 2020年東京オリンピックの追加5競技(空手、ローラースポーツ〈スケートボード〉、野球・ソフトボール、スポーツクライミング、サーフィン)は、全てIWGA加盟競技であり、今回実施された空手、スポーツクライミングは次回のオリンピック競技として関心を集めた。これで、IWGA加盟競技からオリンピック競技になった競技は、通算12競技となり、「オリンピック・アジェンダ2020」提言6-1が示すように、ワールドゲームズはオリンピックと連携する大会になってきている。
- ③ ワールドゲームズは、非オリンピック「種目」の大会であり、オリンピック「競技」の種目であってもオリンピックで採用されていない「種目」は、今回も下記のように実施された。  
〈アーチェリー〉フィールドアーチェリー、〈カヌー〉カヌーボロ、〈体操〉エアロビクス、新体操種目別、スポーツアクロ体操、トランポリンシンクロナイズド、タンブリング、〈ハンドボール〉ビーチハンドボール、〈ボート〉インドアローイング
- ④ IOCがIWGAと締結した覚書に基づき、ワールドゲームズはIOCが連携し後援する大会であることがより明確になり、スポーツ振興基金から今大会に出場する日本人選手に補助金が支給された他、JOC、日本体育協会、日本アンチ・ドーピング機構(JADA)などからの支援が得られた。

『オリンピック憲章』の根本原則には、「スポーツを行うことは人権の一つである。すべての個人はいかなる種類の差別もなく、オリンピック精神によりスポーツを行う機会を与えられなければならない」と「Sport for All」の推進を謳っている。それは、オリンピックムーブメントはIOCとIWGAの覚書に示されたように、単にオリンピックに採用された競技だけの普及をすることだけではないことを物語っている。

今後もワールドゲームズは、非五輪種目の大会としてオリンピックを開催できない地方都市で開催され続けることにより、オリンピック競技大会と車の両輪としてオリンピックムーブメントを推進していくことが期待されている。

成熟社会の中で迎える2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催準備が、オリンピックムーブメントの正しい理解、普及につながり、オリンピックと兄弟関係で共に「Sport for All」を目指すワールドゲームズの価値や役割の認識が広まっていくことを期待したい。